

「合歓の花」

下村 きよ子

槇子は「チツキ」という発音ができない。上京当時、荷物を駅に持ち込み切符を見せると、最寄り駅まで運んでもらえるという便利なものがあったが、駅員さんに「チツキをお願いします」「チツキ届いていますか」

という言葉が「キツチ」になってしまっ、つい小声になってしまっ。駅員さんはわかりそうなものなのに、聞き返してくるのが、槇子には本当に意地悪に思えたのである。

あれから五十年近くも経ってしまっ、世の中は猛スピードで変化した。デジタル化とかIT化とか、有史始まって以来の激変の世は、槇子たち団塊の世代を追い越してしまっっているかのよう思われる。だが、人間の記憶は何十年も前のことであっても、昨日のことのように思っ出すものもあるのである。

今でもよく覚えているのが「東京」行きの切符のことである。何で上野駅で降りて、その切符で渋谷まで行けるのか。東京を知らない姉が何度も説明してくれたが、どうしても合点のいかないまま、大学受験のため上京したことを思っ出す。

槇子の落ち着き先は、渋谷から井の頭線に乗り換えて、40分以上も乗った小さな駅を降り、5分程鉄塔の近くを登った所にあった。大学関係の個人のお宅を女子寮に提供されたもので、寮生は総勢十一人であった。部屋は五部屋で、先輩と後輩が一緒になるよう部屋割りがされ、年に二、三回は部屋替えがされていたよう思っ。全員地方から来ているのに、ネルの生地の寝間着姿は彼女だけであった。

最初に割り当てられた部屋は二階の六畳間で、上州出身の面倒見のよい先輩と一緒にだった。一階の雨戸は閉めるが、二階は閉めない慣わしのようで、夜中に目が覚めると、月光が廊下の窓ガラス越しに射してきて、槇子は初めて他人の家に居るんだという違和感を覚えたものである。

女子寮は十一人なので、食事当番も掃除当番も月に三回ほど回ってくる。食事当番は確か一日千円の予算で、夕食と朝食のパンまで揃えなければならなかった。予算をオーバーすれば、自分の財布から補填をしなければならぬという、実に合理的なシステムで自分たちで運営されていた。新人の中にはお米も研いだことのないお嬢さんがいて、洗剤で米を洗ったというところでもない逸話もあったが、十一人それぞれなんとかお得意の料理で奮闘していた。

槇子の定番は、鮭の塩焼き、里芋の煮転がし、厚焼き卵、ほうれん草のお浸しであった。高校の時、父の転勤で母も札幌に行ってしまった、姉はもう勤めていて、夕食は彼女の役だったので、田舎料理なら槇子は得意であった。

寮には専属のアルバイト先があった。それは某神社の春と秋の大祭の時、能舞台で奉納される出し物のアナウンスと控え室でのお茶出しであった。著名な歌手や舞踊家も来られ、緊張しながらもお茶出しをしたものである。神社で槇子が一番驚いたのは、氷を買いに行かされたことである。熱い麦茶を冷やすために氷が必要になり、それを買うのに社務所を二カ所も回り、やっと許可を得たら、「これに乗って行け」と言われたのが黒塗りのお車であった。たった氷を買いに行くのに凄い所であった。お昼はたくさんの神主さんや巫女さんたちと交代で社務所の台所のような所で戴くのであったが、手作りの糠漬けは絶品であった。

後、同じ寮生のピンチヒッターで結婚式の巫女のアルバイトも槇子はやってみた。有名な式場で、次から次へと新郎新婦がやってきて、親族固めの杯など丁寧に洗っている暇がなかった。それなのに、素焼きの杯に付いた口紅は落ちず、もたもたしているのと、神主さんに「これで拭き取れ」と腰に下げていた手ぬぐいを投げられたのにはびっくりした。

こぢんまりとした寮ではあったが、秋には顧問の先生方をお招きして、寮祭が催された。槇子の卵焼きは先生にも好評で、後に槇子の結婚式に来賓としてお迎えしたのであるが、この時は知る由もなかった。

その時の出し物は上州出身の愛称「お母ちゃん」推薦の「ヨイトマケの唄」であった。寮生十一人全員が黒ずくめの出で立ちで、姉さんかぶりの手ぬぐいをし「父ちゃんのためならエーンヤコラ、母ちゃんのためならエーンヤコラ」と輪を作って歌っ

て踊った。田舎出の槇子は何でこんな泥臭い歌がいいのかわからなかったが、この歌の本当の良さを知ったのは、最近の紅白での迫力ある熱唱を聴いてからだ。それにしても恐るべし「お母ちゃん」の慧眼。

その「お母ちゃん」に議論をされていて槇子は叱られたことがあった。「どんなきれいな事を並べたってこの世は弱肉強食だ」と言った自分に対して、熱き肝っ玉お母ちゃんから

「それは違う！」

と、猛然と反撃された。口角泡を飛ばして激しく教えてくれたその意味が、後年になってやっと槇子には理解できたのである。卒業後、お母ちゃんは故郷に帰り、独身を通して教職人生を送ったと聞いている。

寮は三年生になったらそれぞれ下宿するなりして出て行く慣わしだったけれど、土台協調性のない槇子は一年で出て行くことにした。自分で勝手に決めた下宿先は、駅から20分以上も歩いた竹藪のある寂しい一階の間であったが、東京に出張してきた父に見せた所、猛反対され、あえなく寮に出戻ってしまった。送別会までしてもらった同級生に温かく迎えられる、恥ずかしいやらありがたいやらで、出戻った以上は集団生活にどっぷりはまろうと槇子は覚悟を決めた。何事も居直ってみれば住みやすくなるものである。だが、絶対老人ホームにだけは入りたくないと、この時自分に誓った。しかし、先のことはわからない。

槇子は大学に入って、ある真実に目覚めた。それは高校時代から憧れていた文芸批評家と、一代で大手出版社を築いた人の講義を受けた時である。お二人とも、学生たちに敬語を遣い、決して威張らないのである。田舎では校長先生でも、市長さんでも、偉い人は厳めしく、近寄りがたかった。だが、全国新聞に連載されるような偉い人なのにとっても謙虚なのである。その時に「本当に偉い人は威張らない」という真実を学んだ。以来、槇子はこの物差しで人を測ってきた。人間的に偉い人はみなこの物差しに合致し、人相も深みがあって優しく、魅力的なのである。

渋谷の陸橋を肩を怒らせて歩いてくる見慣れた人が見えた。前から阿修羅像のよ
うな面立ちの人だなど思っていた「短歌研究会」の先輩である。その人は手に紙袋
を抱え、いつになく言葉数が多かった。聞くところによると短歌の大きな賞に選ば
れたとか、嬉しそうにその雑誌の入っている袋を楨子に見せてくれた。この人が後
に彼女の夫になる人であったが、大先輩に声をかけてもらえたなんて驚きで、だか
ら今でもその時のコートをひらつかせ歩いてきた光景が楨子には鮮明に思い出され
るのである。

先輩は留年という形で学生の身分を確保していた。「関東学生歌人連盟」を立ち
上げ、他の大学との交流を図ったり、注目される歌人を招いてシンポジウムを開催
したりと、生き生きと活動していた。先輩の案内で行った「寺山修司」の講演。ま
だ70年安保闘争のバリケードが残っている某大学の一室で聴いたのであるが、あ
のニヒルな短歌を創った作者とは思えない純朴さがあって、うつむきながらポツポ
ツと話す、かなり訛のある温かな響きが印象的であった。この天才芸術家も決して
威張ってはいなかった。

先輩はサークルの仲間を鎌倉にいる放浪歌人の所にも連れて行ってくれた。ボロ
ボロの身なりで髪も伸び放題のその人が私たちを鎌倉駅まで出迎えていてくれた。
あまりの異様さに楨子はたじろいってしまった。

案内された住まいは崖っぷちに建てられた農具小屋のような所で、確か電気もな
かったと思う。辺り一面に生えている野芹を入れたすき焼きで学生たちを歓待して
くれた。戦争で片眼を失い、なかなか定職にも就けず、近所の農作業の手伝い、あ
るお寺の住職さんからの援助などで暮らしているとのことなど、照れながら話され
るのであったが、短歌がこの人の唯一の拠り所になっているということがひしひし
と伝わってきた。前歯のないその人は先輩のことを「先生」と呼び、その度に先輩
は口を手を当てて笑いながら「よしてください」と拒むのであった。何でも先輩が
その人の作品をアルバイト先の出版社に推薦したとかで、義理堅いその人は亡くな
るまでずっと楨子の夫を「先生」と呼んでいた。

その後十年程して、その先輩と榎子は紆余曲折ながらも結婚した。式にその人は真つ白なスーツにエナメルの白い靴というおしゃれな身なりで出席された。もうその頃は短歌の収入もあったのである。わざわざ榎子の所に寄って来て、

「けんかしたらいかんよ」

と言った。この人はすでに榎子の性格もこの結婚の行方も見越して、心配されていたのだと思う。

案の定、榎子の結婚は未熟なものであった。夫に定職がなかったのである。この夫婦には結婚への覚悟が不足していた。夫は三十歳を超しても、日赤の院長をしていた父の経済力に頼り、短歌の革新を図るという理想の元、定職に就こうとしなかったのである。多分結婚はしたくなかったのだと思う。榎子は何度別れようと思ったかわからない。だが、この二人の間には「優柔不断」という厄介な物が巣喰っていた。榎子が三十歳に手が届こうという時にさすがに田舎の両親の手前もあり、結婚というけじめをつけたのである。

その当時、田舎の風習として、「嫁もらい」というものがあつた。都会でいう「結納」に当たるものであつたが、すでに夫の母親は他界していたので、老父と夫が榎子の田舎に「嫁もらい」に来たのである。

道案内ということで、榎子も老父のいた信州から新潟の実家に一緒に車に乗って行った。いくつもの山を越え、この峠を越えたらいいよ榎子の家が近づくという所でいったん車を止めた。もう日は暮れており、なだらかな山の斜面は、薄墨色の杉木立で縁取られていた。その間を縫うように灰白い道がカーブを作って降りている。老父がぼつりと

「新潟の家に行くのが怖い」

と言った。そのたよりなげな夕景色と老父の言葉がずっと榎子の胸に残っている。

結婚式でも義父は

「未熟者の二人ですが、よろしくお願いします」

と型通りではあるが、真実味のある言葉で挨拶した。本当に適齢期を超えている

ものの、全くの世間知らずの二人であった。

仲人はかつて大学に招いた歌人が引き受けられ、来賓には、楨子の尊敬する例の出版社のお嬢さんや編集長、楨子の卵焼きを誉めてくださった先生、あの鎌倉の歌人等々、今思えば豪華な面々であった。

一番喜んでいたのは楨子の母ではなかったかと思う。花嫁姿を本当に嬉しそうに見ていた。この結婚を一番心配していたのは父で、

「親の言うことなど聞かない娘だから仕様がな

と、彼女の友人に話していたと言う。

この結婚に影が見え始めたのは、夫が参加していた仲人の「歌の会」を離れた頃からである。夫の理想とする「歌の会」と主旨が変わって行ったようで、堪え性のない夫はその会から離脱してしまった。長女が生まれた時は、田舎の風習に合わせて新潟まで来てくれた仲人夫妻とも疎遠になってしまった。時同じくして、舅も亡くなり、家計は楨子の肩に大きくのしかかってきた。結婚して、四、五年後のことである。

「せっかく大学まで出るんだから、女の子だって教師くらいにはなってもらわな

いと」
と言った母の言葉が、将来に当てのない楨子には引つ掛かっていた。本当は彼女は作家の妻になりたかったのである。高校の頃、テレビドラマで、「みだれ髪」や「クララ日記」があった。

無頼派と呼ばれるものに普通の生活からは求められない魅力を感じてしまった。

「アウトロー」何と潔い響きか。レールの敷かれた安全な人生の何とつまらないことか。ただ、ドラマでは与謝野晶子の活躍とはうらはらに売れない鉄幹が庭でうづくまってアリの潰していた場面があった。この夫婦像から、妻は夫より勝っては不幸になることが見え、こんな単純な理由から作家の妻がいいと彼女は思ったのである。第一楨子には文才がないのは本人が一番承知していた。

二軒しかない田舎町の本屋でやっと見つけた「みだれ髪」、その歌集は薄暗い奥の書棚に、ひっそりと納まっていたのを思い出す。とにかくこの小さな町で一生を

終わりがたくないという思いが強く、楨子は上京したのであるが、大学を卒業するに当たり、母の言葉通りになっていた。

高い理想も覚悟もないまま、教師になってしまった楨子。卒業していきなり下町の中学校の二年生の担任となってしまう。事ある毎に去年の担任と比べる生意気な生徒たち。何回、八歳しか変わらない生徒たちと真っ正面から衝突したことか。ある日、教卓の上に鬼のような形相をした写真が載っていた。見覚えのある服装で、よく見ると自分の顔であった。いつの間にか、隠し撮りされていたのである。

教師としての覚悟のなさを学年主任の先生にこっぴどく叱られたことがあった。

「いいかげんな気持ちで教師になるな！」

目を剝いて真剣に叱ってくれた。だが、なかなか結婚しない楨子に、

「早くいい人を見つけろ」

と言うのが口癖であった。結婚式では「こんないい人がいたんだね」と言ってくれ、式の後からは、

「旦那さんの本は売れているか」

というのが口癖であった。その先生も去年亡くなられてしまった。八十歳を過ぎても、箱根駅伝では世話人として、毎年テレビでお元気な姿を見ることができたのに、お通夜に行くと何百人という弔問客の列が途切れなく、「本当に偉い人は威張らない」という楨子の哲学そのものの先生であった。

生活のため、楨子は否が応でも教師として頑張るしかなかった。「この仕事を好きになるう」と決意した時、今まで見えていなかったものが見えだしてきた。同僚の一挙手一投足の中にある本質的な物を教わった。それと同時に惰性で仕事をこなしている人の多さも見えてきた。

「東京」という住所にこだわった夫の気持ちを顧みず、楨子は千葉の分譲住宅を買った。高い家賃を払うよりは、マイホームが欲しかったのである。義父からいくらかの援助はしてもらったものの、東京では手頃な住宅は望めなかった。夫は創作

活動を続けるためには都内に住むことがいかに大切かを、妻には説明しきれなかったのだと思う。多分、夫にも強く主張するだけの自信がなかったのではないかと、今なら想像できる。あれほど妻が強くなってはならないと思っていた夫婦の形が、この頃でき始めていたのである。

千葉は何をするにも車がなければ用をなさなかった。引越し当時、コーラ一本買うのにも車で行かなければならないと面白半分には笑っていた夫婦であったが、そこで暮らす大変さは何も分かっていなかった。

千葉のニュータウンは、土地の広さも間取りもほとんど同じ、ローンを組むことから必然的に同じような年齢、経済状態、家族構成となっていた。だいたいどの家も企業戦士であるご主人が東京に出勤し、奥さんは子育てというのが一般的であった。そんな中で稼ぎ手が妻、家事が夫という世間とは異端な家ができていたのである。

夫婦二人だけなら、それほど問題はなかったであろう。だが、長女に続き、この団地で息子も生まれたのである。普段、母親である自分が家にいない分、楨子は近所にとっても気を遣った。全員母親のいる子達の中で遊ぶ我が子が不憫で、遠慮がちにご近所付き合いするのであった。

夫は楨子の駅までの送り迎え、幼稚園の弁当作り、近所の主婦に混じっての幼稚園バスの送り迎え、赤ん坊の世話、おしめの洗濯、スーパーへの買い物、夕食作り、深夜は短歌の創作と頑張っていた。今でこそ市民権を得ている「主夫」であることにも引け目を持たずにいた。世間に卑屈になっていたのは楨子の方であった。

「ご主人偉いわね」

「あなたが大黒柱なのよね、頑張ってるね」

「体、壊さないでね」

等々、相手は楨子のことを気遣ってくれているのだが、それらの言葉を楨子は素直に受け止められなかった。彼女には相手の好意を受け入れられるだけの余裕がなかったのである。

実際、夫の仕事はどんどん少なくなっていく。夫は従来のような結社を嫌い、自分で同人誌のようなものを作っていたが、たまに手にする季刊誌は会員の数が

減っていた。千葉に引っ越した頃は、東京からも夫を訪ねて来る人もいたというのに、いつとなく途絶えてしまった。

夫は自分の仕事に触れられることを嫌うので、何も楨子は言わなかったが、ある日、本屋で短歌の総合誌を見て愕然とした。かつて結婚式に参列してくれた人たちの作品がたくさん載っているのに、どの総合誌にも夫の作品はなかったのである。

「何で？」「どうして？」書店で泣く訳にもいかず、夫にも言えず、心にぽっかりと穴が空いてしまった。

学生時代あんなに生き生きとしていた人の姿はもうなかった。

「働いて！」

と口癖のように責める楨子から、夫は最後にドアをボタンボタンと閉めて逃げてしまう。

今でも「父の日」が来ると、幼稚園の嫌な思い出が甦る。「父の日参観日」になると、園児一人一人が

「お父さんのお仕事は○○です」

と誇らかに発表するのであるが、娘も息子も多分

「自由業です」

と言うしかなかった気がする。もう既に楨子は夫を尊敬するどころか、軽蔑してしまうようになっていた。

覚悟のない結婚をしてしまった結末は、泥沼であった。とうとう耐えきれず、楨子は長女を連れて家を出た。思い切って離婚してしまえばすっきりしただろうに、やはり例の「優柔不断」が出てしまうのである。

カーテンもまだ間に合わない部屋で初めて寝た夜、楨子はあの感覚を思い出した。上京して初めて他人の家で寝たあの感覚である。窓から射す白々とした月明かり、あれから三十年余り経っているのに、同じ寄る辺なさを感じている。薄闇の中で真底、孤独が横たわっていた。空しいというより、どこにも根を張れない中途半端な

生き方が浮かび上がってくる。人生も実りの秋を迎える年齢になっているのに、自分は何をしているのだろう。同世代の女の人は、家を守り、夫を支え、孫まで生まれ、しっかりと自分の根を張ってどっしり構えているではないか。榎子には何もなかった。

実際、中古のマンションには何ひとつなかった。輪ゴム一つ、メモ用紙一枚だつて、何も無い。引越した当初は、ストッキングのカバー用の厚紙ですら、もったいなくて捨てられなかった。まるで無人島みたいだと思った。車を運転できない榎子にとって、生活に必要な品々は全部自分の手で運んだものである。

だが、榎子は新しい生活に意外とすぐに慣れた。もともと彼女には根を下ろすという母性的なものが欠落していたのかもしれない。物欲というものもなかった。できれば手荷物一つで放浪できる身になりたい。学生時代一人旅を何回かした時の解放感みたいなものが久々に戻ってきたような、そんな気分にも、呆れたことになるのであった。榎子が子供を持ったのは、子供にとっては不幸なことではなかっただろうか。いや、夫にとっても不運なことではなかっただろうか。最終的に彼女は家族よりも、世間体よりも別居という形で自分を取ったのだと思う。それでいて、夫同様、煮え切らない榎子は、離婚をする勇氣もなかったのである。

別居を続けて、十年近くが経った。相変わらず榎子は生活のため、退職しても嘱託として教員を続けていた。嘱託は現役時代とは違って、周囲に遠慮しながら、一歩引いて働かなければならず、勝ち気な彼女にとっては「自分を殺す」修行の日々であった。

秋に「鎌倉遠足」があった。今時の遠足はほとんどが班行動である。榎子のチェック場所は「高德院の大仏」であった。あいにくのどしゃ降りの中、生徒たちは嬉々として男女はぐれずにチェックを受けにくる。生徒に向かう時だけが榎子の心を軽くしてくれる。無事全員が通過すると、次の巡回場所へと急ぐ。

次の担当場所は「鎌倉文学館」であった。中学生は見学もそこそこに次のコースへと無邪気に文学館を出ていった。榎子には比較的時間の余裕があり、じつくりと館内を見て回ることができた。

「鎌倉ゆかりの文学者」の部屋があり、よく見ると、ガラスケースの中にあの放

浪歌人の歌集が展示されていた。思いがけずその人の名前を見いだしたのである。槇子は心の中で

（良かったですね。晩年こそ認められたというものの、苦勞の多い人生だったのに、あなたの文学は残りましたね）

とケースの中に向かって、語りかけていた。

帰りの坂道、雨は幾分弱まっていたが、槇子の心中は複雑であった。夫の一生で何だったのだろう。その妻や子供たちの苦勞は何だったのだろう。夫は今も短歌を創り続けている。槇子がたまに目にする作品は、しみじみと透き徹ってくる響きがある。だが、中央歌壇からは全く消えてしまっている。歌人として存在していくには、夫の生き方はあまりにも浮世離れしているからなのだろうか。槇子にはまだあの華やかだった結婚式の日が未練となって残っているのであった。

東日本大震災から二年後、東京都は中学生向けに震災の記念誌を作った。カラー版の立派な冊子で、それをめくっていくと、あの槇子の卵焼きを誉めてくださった先生の長歌が載っていた。たくさんの震災で亡くなった方々への鎮魂歌で、大自然への畏れ、人間のかなしみを深く慟哭する万葉歌人の名歌であった。あまりの衝撃に思わず机を隣にしている同僚に

「この歌人は、私たちの結婚式に来てくださった方なの」と、話してしまった。同僚は

「こんな偉い方が出席されたなんて」

不思議そうに返事をしてきた。

それもそうであろう。槇子は家族のこと、ことさら夫のことは職場では話さなかったからである。なぜなら、誰もが複雑な彼女の家庭のことは知っていたはずだからである。現に職場を転勤する度に、その職員の家族構成をしっかりと教えてくれる親切な人はどこにも必ずいた。そんな中で、家の話など軽々とできようはずはなく、職場で繰り広げられる家の自慢話の輪に入ることもできなかつたのである。

結婚式で、あの震災を詠った歌人は夫の短歌について、

「非常にナイーブで詩人としての資質はすばらしいが、生活感が物足りない」

というような事を話しておられたとか、槇子はお色直しで聞けなかったが、後からそんなことを母から聞いたような気がする。既に先生は夫の将来を心配しておられたのだろう。

思えば、あの結婚式の日が、この夫婦にとって生涯最高の輝かしい日だったのだろう。本物ではない夢の輝き、それに槇子は酔っていた。恐ろしいくらい未来が約束されているように思えた。

テレビを見ても、新聞を読んでも、夫の身近にいた人が時々目に入ってくる。書店の前を通れば、かつての仲人の特集が並んでいる。槇子はそれを横目に職場へと急ぐ。還暦を過ぎても生活のため働いているなんて、結婚当初、彼女は想像しただろうか。

槇子は夢を見ていたのだ。夢を見て一生を棒に振ったのだ。夢と現実の折り合いってどうつけたらいいのだろう。夫はいつか世に出るだろうと、夢を見続けて晩年までやってきた。夢を見ていたから、やってこられたのか、夢を見ていたから、現実がわからなかったのか。だが、その夢はほんの束の間だったとはいえ、一度手にしたものでなかったか。どこで失くしてしまったのだろう。もう元には戻れないことはわかっていて。それなのに諦めきれない自分がいて、夢に囚われれば囚われるほど、鬱々とした現実の中で、何十年と生きてきた。本当に愚かな人生を生きてきたのだ。

槇子と同じ夢を見ていた人がいる。もう九十を越えた槇子の母である。どれだけこの結婚の行方を心配しただろうか。それでいて俳句を生き甲斐にしていた母は文学というものに夢を見たのである。

退職を機に槇子は胸の内を描ける随筆に魅了された。ある文芸社が主催する随筆集に作品を載せてもらった時、

「全部本当のことだね。小さい時のことなのによく覚えていたね」

と、母は感心してくれた。だが、次の年、出された本を見せると、認知症の進んだ母は字を読むのも億劫のようで、その本には興味を示さず、枕元にあった去年の

本を指して、

「これを書いた人は本当に苦勞した人なんだ」

と、まるで槇子が遠くにいつてしまったかのように言った。目の前の槇子を娘とは認識できず、もう槇子は過去の人になってしまっていた。過去の人にしてしまいたかった程、一生を苦勞した娘が不憫だったのだろうか。

夫は槇子が家を出ていく修羅場のころ、一度タクシー会社の講習を受けたことがあったようだ。普段からあまり物を言わない夫なので、そのことも槇子は後で知ったのだが、結局、夫には無理のようであった。体も弱く、人付き合いも苦手で、第一就職するには年を取りすぎていたのである。

槇子が家を出て一年後、夫は緊急手術を受けた。職場に病院からいきなり電話がかかってきた。

「奥さん、お医者さんからお話があるそうです。ゆっくりでいいですから、今から病院に来てもらえませんか」

というわざと落ち着かせるような看護婦さんからの電話で、慌てて病院に行くと、医師から、

「今からすぐに手術をするので、同意書に印を押してもらいたい。切って見ないとわからないが、最悪の場合は人工肛門になるかも知れない」

と告げられた。手術は二、三時間であっただろうか。大腸の憩室とかいうところが化膿していたとかで、さいわい人工弁にはならず済んだが、お腹は縦にかなりの長さで切られていたようである。

血を見ると、卒倒してしまったため、義父は医者にすることを諦めたそうであるが、その夫がこの手術では泣き言一切言わなかった。妻に去られたひびがストレスとあって体に出たことは槇子には痛いほどわかった。わかったけれど、表に出して詫びることができるほど、彼女の胸の内は簡単ではなかった。長年かけて溜まった癩りが許さなかったのである。

「芸術は毒だ。現実を見る」と誰かが言っていたのが思い出される。だが、芸術

に魅せられた人はそれを手放せないではないか。その芸術が本物なら救われるだろうが、それはだれが評価するのだろうか。

そもそも「現実」と「芸術」は切り離せるものなのだろうか。現実は何の究極のところ、夢まぼろしの世界ではないだろうか。せいぜい生きても百年、みんな死んでいく。永久に残るものなど何もない世界。これが現実なのだ。それなのに日々の生活に追われ、目の前のことにしか翻弄されない自分がいる。ふと気づいた時、空しい時間が流れていることにどうしようもない不安や物足りなさを感じる。そんな現実から人は音楽や絵画、文学、その他諸々の芸術で救われるのではないだろうか。

この年になってみると、一年があつという間に過ぎてしまう。お正月はついこの間のことだったのに、もう梅雨入りとかで、半年が過ぎようとしている。ある人が、「赤ん坊の一年は、六十歳の人にとっては、六十分の一の長さでしかなく、年を取れば取る程、一年が短い」

と、言っていたが、本当にその通りだと思う。小さい頃はもっと一年が長かった。いろんなことが過ぎていった分、時間の感覚が早くなっていくのだろうか。何もしないでも一日があつという間に過ぎてしまう。考えてみれば、不思議な世界に生きている。朝、昼、晩があることは、地球が猛スピードで一回転している証拠なのだ。四季があるということは、月の満ち欠けがあるということとは思いをめぐらせると、この世が夢まぼろしの世に思えてくる。同時に四季の移り変わり、自然の美しさにはっとさせられる。年々桜の魅力は増していき、新緑のまばゆさには目を奪われる。冬の月の美しさは格別で、明け方、夕方に紺青の空に浮かぶ月は手が届きそうにくつきりと間近に見える。若い時は気がつかなかったことである。

この春、槇子は嘱託を辞めた。「長年の経験を生かして」というのはお題目で、体のいい雑用係としてしかみない職場に我慢ができなかったのである。お金はもらえなくなったが、ストレスのない生活は別世界であった。

槇子はもともと、文章を書くのが好きだった。そして随筆文を読むのも好きだった。詩や短歌はどちらかというと苦手、すんなりとその世界に入り込めないのだ。時間があるのに任せて「枕草子」をじっくりと読んでみた。有名な段しか知らなかつ

た槿子にとって、読み進めていくうちに、千年も前の作者が、現代人と変わらぬ感情で生きていたことがわかり、急に清少納言が身近な人に思えてきた。

「けんかをした恋人に強情を張って一緒に寝まいとしていたら、相手は夜具を独り占めして寝てしまった。冬に単衣のままでは寒く、闇夜の音も怖く、仕方なくそつと男の夜具に忍び込んでしまったら、相手は狸寝入りしていて憎たらしい」というところは男女の意地の張り合いがリアルで実に面白い。他に、乞食尼との遣り取り、海辺に実際行ったらしい描写、殊に海女と舟の上の夫との違いを女の身になって同情しているところなど、千年の時間もひとつ飛びで、読者に伝わってくる。「文学」って凄いいものだと思う。

槿子は今、ずっと胸の内に燻っていたことを文章にしている。すると、いろんなことが見えてくる。そして書くことによって槿子は自分が救われていることに気がつく。長年の鬱積されたものが融けだし、浄化され、流れていくのである。夫への恨み不満、人生への嘆き絶望、世間への憎しみ、そういったどす黒い感情が、書くことで消えていく。

「人生が終わりに近づくと、だれでも自分自身に大きな肯定をしたくなる」

と、ある中堅作家の言葉を目にしたが、そんなに簡単に言ってもらいたくないけど、本当にそうかもしれない。今さら後悔してもどうしようもないではないか。一回しか生きられない人生を否定するなんて、あまりにも残酷すぎるではないか。

槿子は晩年に向かう今こそ「覚悟」が必要なのだと思った。結婚も仕事も出産も全て自分が選んできた道である。選んだ以上は責任があるのは当然なのに、彼女には真の「覚悟」がなかった。責任を取ろうとしない逃げの姿勢が自分を苦しめ、家族を苦しめていたと思う。なんと狭い見のもと、この世を渡ってきたことだろう。

槿子の書く文章は槿子を救ってくれている。書きながら、もしかして、夫も短歌で救われているのではないかと思ひ始めた。短歌以外何もできなかった夫ではあるが、それだからこそ、短歌に没頭できた一生はある意味、幸せだったと言えるのかもしれない。

文学にはそれなりの力がある。土台、芸術と名のつくものには、人を救ってくれ

る不思議な力がある。自己満足で終わるものもあるだろうが、自己満足であっても、自分を救ってくれることは確かである。そして、自分以外のたくさんの人も救えるもの、たくさんの人が時代を超えて共鳴してくれるものが、文学とか芸術と呼べるものなのだろう。

いつか死ぬこの世は夢まぼろしの世界だとも思う。ふと「夢中」という言葉が浮かんでくる。「夢の中にいる」……「夢中になれるものの中にある」時こそ、この夢まぼろしの世で生きていることになるのかもしれない……。そうだ！人を救ってくれるものは芸術だけではなかった！仕事に没頭している時、子育てに必死になっている時、遊びに熱中している時、とにかく夢中になるものの中にいる時すべてがこの夢の世で生きているということになるのだと、槇子は今やっと気づいた。当たり前なことなのに、やっと真の意味に気づいたのである。

夕方、台所に立つと、道路で子供達が夢中になって遊んでいる様子が窓越しに見える。甲高い声を上げて、体全体を動かして、夢中になって走り回っている。そういえばみどりごも起きている間中、四肢を絶えず動かしていたことを思い出す。生命力の塊である子供こそ、夢中でこの世を生きているのだと思う。

ずっと満ち足りぬ思いで生きてきた人生であったが、もう嘆くのは止めよう。人を恨むのは止めよう。もう苦しむのはたくさんである。全部自分で決めた道である。槇子の望んでいたものって何だったのだろう。世間に認められる生活？……いや、生き生きとした夫の姿が見たかったのだ。あの渋谷の陸橋を、コートをはひらつかせて歩いてきた、あの颯爽とした姿が見たいのである。

元の千葉の家の近くには里山を利用しての公園がある。月に一、二度掃除に帰る槇子は、ふと夫を散歩に誘った。公園までの田んぼ道は梅雨空の下、緑の景色が広がっていた。若い稲はあくまでも青く、奥の里山はこんもりと薄緑にけむり、杉は緑青の幹を真っ直ぐに連ね、濃い緑の塊が空を縁取っていた。

「一面、緑のグラデーションね」

と、楨子は大きく息を吸い込んで言った。

「マンションには緑がないからね」

と、夫はさしてめずらしくもなさそうに言った。

「あの鳥は何？」

「雉だよ」

「白鷺はいないね。冬しか見られないのかなあ」

「白鷺は留鳥だからいるはずだよ」

「これがガマ、日本列島どこでも見られるんだよ」

「因幡の白ウサギのガマのことね」

「あの鳴き声はウグイスではないなあ」

散歩をすると夫もよく話す。

公園の池は連日の雨で濁っていたが、人影を察知して鯉が寄ってくる。おにぎりの米粒を散らすと、思いの外たくさん鯉がやってきて、面白いほどよく食べる。遠くから亀もやってくる。亀を目がけてご飯粒を投げて、すばしこい鯉に取られて、亀はもらえない。「やっぱり亀ってとろいのね」

「失礼します」

突然の声に振り向くと、公園の管理人らしき人が箒で足下を掃いていた。

「こんにちは……この鯉って餌はもらってるのかしら」

「はい、やってますよ」

楨子は安心した。あまりの食い付きぶりに心配していたのだ。

「誰がやってくれてるのかしら」

「僕が朝夕やってますよ」

「まあ……」

本当は（ありがとうございます）と楨子は言いたかったが、それもおこがましいようで、笑顔で返した。そのおじさんは、楨子たちが池に降りて行く時、向こうの丘に見えた人だった。何時の間に楨子たちの所に来たのだろうか。あまりの速さにびっくりしたが、見知らぬ人にこの夫婦は話しかけられたのである。話しかけやすい雰囲気はこの夫婦は持っていたということであろうか。楨子はそれが嬉しくてならなかった。何だか肩の力が取れている感じがした。

見晴らしのいい高台でおにぎりを食べた。あり合わせのおかずを詰めた夫手作りのお弁当はどれも薄味だった。筍、烏賊の煮物、小松菜の辛子和え、この年齢には何よりのご馳走である。もう油っぽいものは苦手になってしまったのだ。

登ってきた小道の階段を降りた時、合歓の花に気づいた。羊の筆のような柔らかい毛先は淡いピンクに染まり、葉もオジギソウのようで思わず手を触れてみたが、しぼむことはなかった。この大きめの葉の広がりの上に花があったから、下からは見えなかったのだ。瑞々しい葉の上に点々と可憐に咲く合歓の花は本当に優しく美しかった。

帰りの山道、前方に団地の屋根が見えた。里山と里山の間、同じような形の家が周囲の風景とはちぐはぐに固まって建っている。

「こんな山の中に団地を造って、儲けたのは不動産会社だけね」

「……」

「一軒家が欲しくて、みんな頑張ってきたんだよね」

「……」

槿子には団塊世代の、夢を見て頑張ってきた姿が自分と重なって見えてくる。通勤快速の骨も折れんばかりの混雑が思い出される。「ベビーブームの君たちは墓場まで生存競争だよ」

と、小学校から先生たちに言われ続けて、ギューギュー詰めめの教室で槿子は育ってきた。社会の大きな渦の中でみんな懸命に生きてきたのだ。その夢の象徴がこの山の中の団地だったのだろうか。（何だか人間て悲しいな）と槿子は思った。

結局、この地に根を張ることはできなかったが、夫はしっかりと根を下ろしていた。短歌の教室をいくつか持ち、年上の生徒さんからも慕われているようである。もしかして夫の方が生活人だったのではないだろうか。槿子は一人で闘って、一人で傷つき、一人で飛び出したような気がしてくる。人のことは見えるのに、自分のことは何も見えない。それに夫の心もよく見えないのだ。

下からは見えなかった合歓の花のように、これから先見えなかったものが見えてくるのだろうか。夢まぼろしの世で、できればそれが自分を救ってくれるものであって欲しいと思うのである。

